

## 〔研究余録〕

### 武鑑からみた白鳥献上

宮本 敏史

#### はじめに

元禄十年（一六九七）、人見必大によつて著された本草書『本朝食鑑』の「禽部之二 水禽類」には、常陸国や陸奥国で捕獲される白鳥は、他地域のものに比べて良質かつ美味であると記されており（正宗敦夫編『本朝食鑑』上 日本古典全集刊行会 一九三三年 四五四～四五五頁、島田勇雄訳注『東洋文庫三一 二 本朝食鑑』二 平凡社 一九七七年 一六〇頁）、近世において、右の二地域産の白鳥は上質のものとして認識されていたことがうかがわれる。

一方、幕府、あるいは將軍への献上品目の中に白鳥が含まれる藩もみられ、幕府との献上儀礼として白鳥が重宝された形跡もみうけられる。

本稿では、献上品としての白鳥が、いかなる政治的意味を有していたかという点について考察を行う。具体的には、当時全国的に出回った武鑑の中に、白鳥を献上した大名家がどのように記されているかを分析する。その上で、他史料にみえる献上品目の記録と比較して、武鑑の記述の性格について考察する。なお、本稿では、武鑑全体を指す場合は武鑑、特定の武鑑を示す場合には『〇〇武鑑』というように表記した。

#### 一 武鑑の概要

武鑑とは基本的に、幕府役人および各大名の名鑑である（藤實久美子『江戸の武家名鑑―武鑑と出版競争―』吉川弘文館 二〇〇八年 一二頁）。民間の書肆が出版したもので、板元によつて内容・構成などに差がみられるが、基本的には「大名付」（大名家に関する情報を集約したもの）二冊、「役人付」（大老・老中以下の幕府役人に関する情報を記したもの）二冊を一組にした合計四冊からなる（同前）。「大名付」には、大名家自体に関することから、藩の支配機構や制度、藩の地理的情報などが記されていて、この中に「時献上」の項目が含まれている。「時献上」とは、各大名家が毎年決まった季節に將軍家に対して行う献上を指し、献上回数・品目・数量の多寡は石高や官位に影響されることはなかった。この「時献上」という用語は武鑑特有のもので、明和二年（一七六五）に出版された『明和武鑑』以降の武鑑で一つの用語として定着している。

#### 二 武鑑の「時献上」からみた白鳥献上

「時献上」として、どのような大名が白鳥を献上していたのであろうか。以下、本稿では、『文化武鑑』（石井良助監修『文化武鑑』一・三・五・七 柏書房 一九八一年～一九八二年）を中心に検討することにした。

文化元年（一八〇四）の『文化武鑑』から、白鳥を献上していたのは、陸奥国では、盛岡藩主南部家、仙台藩主伊達家、二本松藩主丹羽家の三家、出羽国は、秋田藩主佐竹家、常陸国は、土浦藩主土屋家、下総国は、多胡藩主松平家、以上の六家であった。また、献上月をみると、一〜二月（松平家）、二月（佐竹家）、七〜八月（丹羽家）、八月（南部家）、十二月（伊達家、土屋家）となっており、おおむね冬季から春先にかけての時期に多く献上していることが明らかになった。

これらのことから、白鳥を献上した大名の領地は、前掲の『本朝食鑑』で示す地域とほぼ重なっている点を指摘することができる。つまり、上質の白鳥を有する地域と、それを献上する地域はほぼ一致するのであり、将軍家への献上儀礼の中では、大名家が自らの領地内でしか入手できない特産物を将軍家へ献上していたのである。

こうした地域の特産物の献上に関して、大友一雄氏は、「その領地から安定して産物が献上されていくことは、その領地の支配は安定していることを意味する。各地域から将軍への産物献上は、単に領地が豊穡であることのみならず、その領主の支配が安定していることの象徴的な意味として、将軍のもとへ集められたといえる。将軍のもとに、このように重層的に編成された献上儀礼は、江戸殿中にあつて将軍が自己の統治能力を確認するためのものとして存在したに違いない」『日本近世国家の権威と儀礼』吉川弘文館 一九九九年 三八〜三九頁」と指摘している。この指摘は、白鳥献上についてもあてはまるといえ、地域の産物は、献上儀礼を通じて、大名家、将軍家双方から政治的意味を付与されていたのである。なお、『文化武鑑』をみると、伊達家では、文化九年（一

八一二）に周宗から斉宗に、佐竹家は、文化十二年（一八一五）に義和から義厚に藩主が代替わりしたが、白鳥献上は変更されることなく行われている。

ところで、『文化武鑑』にみえるこれらの記述は、他の武鑑ではどのようなになっているだろうか。伊達家に限ってみると、享保五年（一七二〇）の『享保武鑑』にはじめて白鳥が献上品としてみえる。その後、献上品から白鳥の記事がみられなくなるが、前述の『明和武鑑』に「十一月、白鳥」の記事がみられるようになる。以降、安永九年（一七八〇）の『安永武鑑』まで右の記述であった。寛政二年（一七九〇）の『寛政武鑑』になると、「十二月、白鳥」と一ヶ月ずれた記述となっており、以降の武鑑ではこの記述が踏襲された（以上の分析は、深井雅海・藤實久美子編『江戸幕府大名武鑑編年集成』第一〜十八巻 東洋書林 一九九九〜二〇〇〇年を参考にした）。白鳥献上月を十一月から十二月に変更した理由は不明であるが、武鑑全体を通じて、転封や改易のなかった大名家の「時献上」記事は、ほぼ変更されなかったものとみて大過ないであろう。

### 三 他史料の白鳥献上記事との比較

次に、武鑑の白鳥献上記事が、いかなる意味を有するのかについて考察していく。ここでは、仙台藩の官撰史書『忠山公治家記録』延享二年（一七四五）十月六日条（仙台市史編さん委員会編『仙台市史』資料編二 近世一藩政 仙台市 一九九六年 九八号）に記載されている献上品

の目録をもとに検討する。

六日甲辰 (中略)

御代替以前御本丸へ年中之御献上之覚

(中略)

一、白鳥一

御小袖二

重陽之御祝儀

(中略)

右之節、大御所様へ献上物、此間以御書付被仰渡候、

(中略)

右之通御座候、以上、

十月三日

御名

(後略)

この目録は、同年に八代將軍徳川吉宗から九代家重に代替わりする際に作成されたもので、末尾に「附簡 先達被相達候通可被心得候」とあることから、幕府から下命されたものである。これをみると、重陽（九月九日）の「大御所」（徳川吉宗）への献上品として白鳥一羽と小袖二重を確認できる。つまり、この献上品目録からは、白鳥を献上する時期が九月とあり、十一月、または十二月に献上したという武鑑の記述と定期的な相違がみられる。理由は、記述内容の时期的相違であろう。藤實氏も述べるように、武鑑出版に際して板元同士の出版競争が起こっており、各板元は、独自の武鑑を作成するために様々な工夫を凝らしていた。その工夫の一つとして、常に新しい情報を取り入れることが挙げられ、

出版直前に幕府役人などの異動があったとしても、その部分を摺り直していたという（前掲藤實氏著書）。したがって、武鑑の記述は、出版された当時のもっとも新しい情報であるといえるのであり、そうした时期的な献上儀礼の変化をここから読みとることができる。

## おわりに

本稿では、武鑑にみえる白鳥献上記事を通じて、幕藩体制下における献上儀礼の意味について考察してきた。最後に、内容をまとめて総括としたい。

『文化武鑑』の「時献上」の項目に白鳥が記載されている大名家は、全部で六家あった。その大名家の領地の分布をみると、本草書『本朝食鑑』で上質な白鳥の産地とされる地域とほぼ一致しており、將軍家への献上儀礼の中では、大名家が自らの領地内では入手できない特産物を將軍家へ献上していた。こうした各地の産物を献上することについて、大友一雄氏は、領主支配の安定性をアピールし、同時に將軍の自己統治能力を確認するという政治的意味合いが含意されていたことを指摘されており（前掲大友氏著書）、白鳥献上にも同様の意味合いが込められていたといえる。

また、各武鑑をみていくと、右の内容は、『文化武鑑』特有のものではなく、出版・改訂によっても、転封・改易のなかった大名家の「時献上」記事はほとんど変更されていなかった。

次に、武鑑の記事の性格を確認するために、仙台藩の官撰史書『忠山

公治家記録』に収録されている献上品目録をとりあげた。その結果、この献上品目録と武鑑の白鳥献上時期には相違がみられることを確認できた。理由について、商品としての性格を有する武鑑には、より最新の情報が含まれていたという藤實氏の指摘（前掲藤實氏著書）を踏まえると、各記述の時期的な違いによるものであつたと考えられる。

ただし、なぜ白鳥の献上時期が変更されたのか、板元は武鑑記載情報をどこから入手したのか、という点については現段階では言及できなかった。この点に関しては、今後の課題としたい。

（みやもと・さとし 弘前大学人文学部学生）

#### 【付記】

本稿は、平成二十一年度弘前大学人文学部卒業研究『白鳥と近世東北―白鳥と人間との関係―』における研究成果の一部である。本稿作成にあたって、弘前大学人文学部教授長谷川成一先生をはじめ、多くの方々から御指導・御助言を賜った。末筆であるが、この場をお借りして厚く御礼を申し上げたい。